

第 11 回 松本市長と車座集会「みんなの尼活皆議」

＜ ターゲット型 保護者や不登校児童生徒支援団体・機関のみなさまと ＞ ～学びの多様化学校について～

対話録概要

と き	令和6年10月9日（水） 午後1時30分から午後3時30分まで
と ころ	中央図書館 セミナー室
出 席 者	参加者 12人、市長ほか関係者 14人 計26人
トークテーマ	令和8年4月の学びの多様化学校の開校に向けて、「こんな学びの多様化学校になってほしいな」、「こんな取組が他校に広がったらいいな」といった「学びの多様化学校に期待すること」について

【市長のあいさつ】

私は、このように市民の方と車座になって、意見を交換する「車座集会」を年に数回しており、昨年度は4回実施した。今年度は7回目なので、就任してから11回目の車座集会の開催となる。

本日は、ターゲット型ということで、保護者や不登校児童生徒支援団体・機関の皆様に集まっていた。学びの多様化学校については、令和8年4月の開校に向けて準備しているところであり、色々な立場の方から話を聞き、いただいた意見を生かしていきたいという意図を持っている。

後ほど、学びの多様化学校についても説明させていただくが、行政にもっとこういった点に取り組んでもらえたら、より良い学校となるなど、様々なご意見、ご提案をいただきたい。

【意見交換】

＜団体＞以前にも車座会議に出席したことがあり、そのときに公立のフリースクールを設立してほしいと発言したが、時が経過して、こういう形で示されて感慨深い。

また、学びの多様化学校が中学校ということは、既に傷ついている子が通うということになる。当団体に来ている子においても、小学校で傷ついて、中学校で不登校になっている子も多くいる。学校とは傷つく場所であり、先生が原因であるときもあるし、実は家庭に原因があることも結構ある。こうした部分を何とかケアできるような体制であってほしいと思う。

＜市長＞それぞれが持っているエネルギーや能力に合わせて、少し高いところに挑戦し、うまくいったらいいし、失敗しても悔しいと思って頑張るといったことは、人生においては大事なことだと思う。しかし、小学校においてつまずき、傷つくというのは、本人にとっても非常に辛いことではないかと思う。これまで不登校支援に関わってきた先人として、工夫してきたことはあるのか。

＜団体＞不登校の子どもは、その理由を尋ねられた場合に備えて、あらかじめ答えを用意しており、本当のことを言ってくれるまでには相当の時間がかかると思う。子どもの傷つきというのは、周りが想像しているよりも、はるかに深い。そういう子が過ごす学校ということを認識する必要がある。

＜市長＞学びの多様化学校においても、他の中学校で働いていた先生が働くことになるため、考え方を大きく変えなければ、同じような中学校になってしまいかねない。この点については、我々も心して取り組みたい。ただ逆に言うと、そういう先生が増えていくことにより、他の学校も変わってい

く可能性があると考えている。

〈団体〉最近是不登校も低年齢化してきており、勉強に対する意欲が低下している子どもも多い。高校であれば、基礎から学び直すことができる場があるため、高校から勉強を始める子が多かった。この点が、学びの多様化学校ができることにより、より早い段階で遅れを取り戻すことが可能となるが、中学校のカリキュラムではなく、もっと前の段階のカリキュラムから手厚くやっていただけるとありがたい。

〈保護者〉担任とうまくいかず、学校に通いづらくなったが、進級し担任が変わることで、通えるようになったということがあった。その意味で、授業時間数や教室内の雰囲気も重要であると思うが、子どもと関わる先生が何よりも重要である。先生も学校内のルールに縛られており、非常に忙しくしているとは思いますが、子どものことをよく理解してもらいたい。

〈市長〉クラスによっては、あまりうまくいかず、やっとの思いで1年を終えるということもあるが、だからといって、年度途中でクラス替えをするということもできない。この点について歯がゆい思いをしてきたが、学びの多様化学校においては、担任を完全に固定化するのではなく、相性なども考慮して、色々な先生が関わるができるようにすることも大事かもしれない。

〈保護者〉子どもは新しい学年、新しい先生にどうしても緊張してしまうので、最初の1か月ぐらいはお試し期間などとなれば、ありがたい。

〈市長〉学びの多様化学校は新しく作るものなので、そういうことも実験的にできるかもしれない。学びの多様化学校は、初年度から完璧にはならないと思っている。時には失敗もして、怒られながら、完成度を高めていくしかないと思っており、ご理解いただけるとありがたい。

〈団体〉勉強については、学年でカリキュラムを固定するのではなく、一人ひとりの習熟度に合わせて、学習内容を遡ることもあれば、逆に飛び級のようなこともするのが理想であると思う。これを先生一人に対応するのは難しいだろうが、時には異なる学年の子どもも混じることで、教室全体が一体となれば、対応できるようになるかもしれない。学びの多様化学校の定員は40人とのことであるので、勉強だけでない全体の雰囲気づくりにも意を用いていただきたい。

〈市長〉学校よりも塾を経営してきた方の方が、ノウハウがあるのかもしれないので、色々と教えていただきたい。また、公立であれば、夜間中学校において、外国人や中国残留邦人など生徒が非常に多様で、一斉に同じことができず、個々に教えていることもあるが、こうしたノウハウも活用していきたい。

〈団体〉学びの多様化学校ということであるが、「学び」にフォーカスしている理由はあるのか。当団体においては、マイノリティの問題が原因で学校に通いづらくなっているケースもあり、学び以外への配慮も必要ではないのか。

〈市長〉学びの多様化学校という名称は全国的なものであり、以前は不登校特例校という名称であった。この昔の名称については、不登校を特殊に取り扱っている感じがして、違和感を抱いていたが、学びを多様化するという表現となり、良い名称になったと思っている。

この学びの中には、勉強だけでなく、人間関係、社会のルール、大人との付き合い、命の大切さなど、全てが含まれることになる。その意味で、私も市長をやりながら、学びも当然しているし、皆さんもそうだと思う。こうした学びが中心になるというのは、大事なことだと思っている。

〈団体〉ということは、今までの学校教育が目指してきたものとは異なる学校となるのか。

- 〈市長〉そのとおりであるが、だからといってこれまでの日本の学校を否定し、外国のカリキュラムを模した教育をするというわけではない。飽くまでも日本の学校として、今の課題を解決できるような学校を皆で考えながら作っていきたい。
- 〈団体〉やはり先生との関わりがボトルネックとなり、学校に通いにくくなっているという声が多くある。学びの多様化学校ができて、先生たちの意識が子どもたちに向いていけば、自ずと子どもたちも生き生きとした生活を送ることができるようになるかもしれない。
- 〈市長〉学びの多様化学校が特殊な学校であるとは思われたくない。各学校において、学びの多様化学校でできるならうちでもやってみようというようになってくるのが、一番良いと思っている。
- 〈団体〉不登校になる子どもの相談で多いものとして発達障害があり、当団体においてもフリースクールと放課後等デイサービスを併用しているケースも多い。不登校だけではなく、発達障害の子どもも想定した体制を組む方が良いと思う。
- 〈団体〉保育においては療育保育があるが、小学校に上がるとなくなってしまう。学びの多様化学校は中学校となるため、保育とは少し間が空いてしまうものの、療育の視点を持った対策が必要であると思う。
- 〈保護者〉小学校高学年から中学校にかけて不登校であった子どもに意見を聞いてみると、「社会に出ることを考慮すると、学校は必要だと思う」、「自分がしんどさを感じたときに話せるような場所であってほしい」とのことであった。保護者としても、人との関わりにおいては相性というものがある以上、話しやすい担任もいれば、そうでない担任もいるが、話しづらいからといって担任以外の先生と話すのには高いハードルがある。担任以外の自分が話しやすい先生と話しても違和感のない環境があれば、良いと思う。
- 〈団体〉塾においても、講師だけでなく事務のスタッフを含め、子どもたちとよく話をすることがあったが、子どもたちによれば、学校も家庭も忙しくて話を聞いてくれないとのことであった。やはり話を聞くというのは重要だと思う。
- 〈団体〉先日、オランダを視察したが、オランダの学校はいつでも子どもが話に行けるようなオープンな空間となっていた。
- 〈市長〉事務室を閉じた部屋とするのではなく、仕事をしながら話を聞くことができるような開かれた空間とすることも大事かもしれない。
- 〈保護者〉先生はやることが多すぎて、子どもと向き合う時間をとることができない。先生の事務作業を減らすためにも、事務スタッフを増員していただきたい。
- 〈市長〉仮に事務スタッフを増員したとしても、今のままでは効果が上がらず、むしろ仕事の割り振りを変えることにより、学校の働き方を変えていく必要があると思っている。例えば、各学校では諸費の取扱いが負担となっており、これを教育委員会事務局で対応すれば、学校現場の負担軽減を図ることができるが、そのためには、現行において学校ごとに異なっている基準を統一することが不可欠となり、学校ごとの自由度は失われることになる。このように、なかなか難しい課題も含んでいるが、もう少し工夫をしていければと思う。
- 〈団体〉一人ひとり状況も異なるので、大人が一方的に支援をしてあげるというのではなく、子どもが自分で選択できるようにし、その選択肢を増やすのが大人の役割だと思う。先ほど話題になった担任についても、当団体はチーム担任制とし、自分に合う先生と話すことができるようにしている。

- 〈市長〉本当は話し方から気を遣うべきと思うが、何か工夫をしているのか。
- 〈団体〉スタッフ同士を含め、さん付けで丁寧に話すことを大切にしている。
- 〈団体〉空間デザインにおいて工夫できるのであれば、しんどくなったら1人になれるような設計になれば良いと思う。また、登下校の時間が他の学校と同じになると、通いづらくなる子どもが出てくるのではないかと感じる。あと、先生だけでなく地域も教える側に加わるというのは難しいことだと思うが、新設校ということも生かして挑戦し、子どもたちが将来の職業観を学ぶことができれば良いと思う。
- 〈保護者〉なかなか学校に通うことができていなかった子も、信頼できる先生ができたり、サポートルームのような安心できる場ができたりしたことにより、少しずつ変わっていている。ただ、先生や生徒の中には、不登校のことを分かろうとしない人もいるので、もう少し理解を深めてもらえればと思う。
- 〈市長〉確かに、学びの多様化学校以外の所でも、不登校への理解を深める必要があるかもしれない。
- 〈団体〉スクールソーシャルワーカーは、学校にも家庭にも入れる大事な存在である。学校の内と外をつなぐ役割として、常駐していただきたい。
- 〈団体〉給食については苦手な子どもも多く、給食が理由で学校に通えなくなる子どもも多いので、学びの多様化学校においては給食を食べない自由がほしい。
- 〈市長〉法律に基づく給食となると、全員が決められた時間に食べなければならないなどの決まりとなり、学びの多様化学校には合わないと思っている。こうしたことから、法律上の給食は行わず、別途、昼食の対応について検討していきたいと考えている。
- 〈保護者〉先生の中には、不登校対応に係る経験はあったとしても、知識はないことも多いと思うので、講習を受けた先生を配置してもらいたい。
- 〈保護者〉ギリギリの数の先生しかいないため、もう少し先生の人数を増やしてほしい。
- 〈団体〉学びの多様化学校の入学者数を定員に合わせて40人とした場合、その40人全員が実際に通うことができるとは限らない。少し多めに入学させることはできないのか。
- 〈市長〉工夫の余地はあるかもしれない。
- 〈団体〉子どもが自分の思いをうまく伝えられないことで、親との関係がこじれてしまうこともある。自分が思っていることや感じていることを上手に伝えられるようになる訓練は非常に重要であり、学校でしっかりと教えてほしい。
- 〈市長〉親子の問題に行政がどう関わっていくのかは難しい問題であるが、良い手法があれば教えていただきたい。
- 〈団体〉不登校の子どもの親同士しか分からないこともあると思うので、経験談を共有したりしている。
- 〈市長〉学びの多様化学校の先生だからできることもあれば、逆に先生だからこそ苦手なこともあると思う。官民それぞれが得意なところを生かし合いながら取り組んでいくのが良いかもしれない。

【おわりに】

- 〈市長〉本日は非常に有意義な話をすることができた。本日いただいた意見を生かしながら、学びの多様化学校の令和8年4月開校に向けて取り組んでいきたい。

以 上